

開会のあいさつ

山村睦夫 和光大学総合文化研究所所長

本日は秋のさわやかな一日に、こちらにお越しいただきましてありがとうございます。

私どもは和光大学にあるひとつの研究所ですが、毎年シンポジウムを催しております。今年は日本・インドネシア国交正常化50周年ということで、その現代における意味を学術的に考察してみようということになりました。しかし私自身は、なぜ今年が国交正常化50周年なのかと、不覚にもすぐには思い至りませんでした。50年前というのは1958年ですから、太平洋戦争が終わって13年です。13年経ってようやく日本とインドネシアの平和条約が結ばれました。平和条約が結ばれるというのは、戦争の賠償交渉が日本とインドネシア共和国との間で決着したということですが、そのぐらい経ってようやくのことでした。

私を含めて現在問題だと思えるのは、日本人の歴史記憶の中に、太平洋における日本の戦争の問題やインドネシアとの賠償交渉の問題などが、極めて不十分にしか刻み込まれていないということです。私たちの認識を問い直さなければいけないと思った次第です。

そのようなことで、このシンポジウムは、第1回がエネルギー問題、第2回が介護で近年話題になっております人的交流の問題、この二つの柱をたてて両国の関係というものを考えてみたいと思っております。

日本とインドネシアの関係と申しますと、私どもはすぐに原油という形で思い浮かぶわけですが、そうしたある種の単純化された形の日本インドネシア関係の認識が問題です。そもそも原油を通した関係を見ても、いつも安定的に原油を輸入してられるというイメージ自体が、ほんとうにそうなのか、あるいは原油という関係だけで単純化されていてよいのかということがすぐに指摘で



きます。そうした考察の中で私たちが、実はインドネシアと日本の関係についてあまりにも表面的な理解しかできていないということに気づかされるのです。

この50年の両国の交流について、人々の意識がなぜ希薄なのかを考えてみますと、インドネシアと日本の関係が、あまりにもエネルギーや資源の供給と需要という関係でのみ捉えられてきたということがひとつあるのではないかと。人の関係として、日本人とインドネシア人という関係が具体的に浮かび上がってこないという現状があるのではないかと考えられます。そのようなことで、シンポジウムの第2回を「人的交流の現代的課題と未来」として企画しました。

幸い私どもは最近、井上さんが「マス・エンダン」という漁業研修生の映画をお作りになったことを知ったので、このような方がいらっしゃる、そしてこういう研修生がいたのだということを含め、人の関係の中で日本・インドネシア関係というものを考えようとしています。

ちょうど今年は、インドネシアから介護福祉士候補者がはじめて来日されたことで、人的交流の問題がクローズアップされています。これはその制度に直接かわるわけではない私たちにとっても極めて身近な問題なのです。

和光大学には幸いにしてこうした問題に携わっている数名の人材がおりますので、こうした機会を、これからの本格的な研究を展開していく第一歩にしていきたいと考えております。

では長丁場になりますけれども、講演の先生方、会場の皆様、どうぞいっしょに考えていきましょう。

[やまむら むつお]